

第4学年1組 国語科学習指導案

第2校時 場所 4年1組教室 授業者 廣田健生

1 単元名 視点を交えて物語を楽しもう～それぞれの「一つの花」～

子どもたちはこれまでに、なってみる学び（身体表現）を活用しながら物語の読解に取り組んできた。前単元の「白いぼうし」では、松井さんや女の子を演じることで、行動の様子や理由などについて具体的に想像することができていた。しかし、劇を正確に演じることに一生懸命になってしまい、登場人物の気持ちまで目が向かない子も一定数いた。そうした子たちも含め、登場人物の気持ちを豊かに想像する力を育てていきたいと考えた。

そこで、本実践では子どもたち一人一人が視点人物を決め、その人物の立場から『一つの花』のクライマックス場面を書きかえていく活動（変身作文）を行う。この活動をしながら、子どもたちはそれぞれの登場人物に同化し、気持ちを豊かに想像しながら物語を読んでいくことになる。しかし、同じ人物を選んでいても表現した気持ちにずれがでてきたり、人物の気持ちを語りきれなかったりすることもあるだろう。そうした表現のずれや困りごとに出合った子どもたちは、「どんな気持ちだったのかもっと考えたい。」という思いをもち、本文に立ち返っていこう。表現と理解とをいったりきたりするなかで、叙述を基に人物の気持ちを豊かに想像する学びを生み出していく。

2 単元について

- (1) 本単元は、『一つの花』を学習材とし、叙述を基に人物の気持ちを捉え、場面の移り変わりとは結び付けて、気持ちの変化を具体的に想像する力の育成をねらう。

本学習材『一つの花』は今西祐行によって書かれた反戦平和文学である。今西の作品は省略の手法による文学と呼ばれることがある。これは今西が「作品とは読み手の中においてはじめて完成する。」という立場をとっているからである。本単元で扱う『一つの花』も同様である。三人称客観視点で書かれた作品であり、語り手はどの登場人物にも入り込まない。そのため、登場人物の心情などが直接語られることはなく、事実だけが淡々と語られていくという特徴をもつ。そうした文章の特徴に違和感をもつ子どももいるかもしれない。しかし、語り手が多くを語らないからこそ、それぞれの登場人物の視点に立って物語を捉えることで、登場人物の気持ちを豊かに想像できるのではないかと思う。

- (2) 子どもたちはこれまでに「作家の時間」という活動を通して、オリジナルの物語づくりなどに取り組んできている。そうした物語づくりの中では、ほとんどの子が一人称視点で物語を書く姿が見られている。そのため、一人称視点からの物語づくりには取り組みやすいと考えられる。

また、前単元『白いぼうし』では、「不思議を解説する劇をつくろう」という活動を通して、登場人物の行動の理由について考える学習を経験してきた。その際には、実際にならな活動とそれを解説する活動を行き来しながら、登場人物の行動の理由を考えている姿が見られた。本単元の視点を交えて書きかえる活動や叙述を基に人物の気持ちを想像する力は、次単元「ごんぎつね」において、視点の変化や登場人物の気持ちの変化を考えることにつながっていく。

- (3) 本単元に関する子どもの実態は、次の通りである。（調査人数：36人）

① 「白いぼうし」の学習では、ほとんどの子どもが叙述を根拠に気持ちを捉えることができ

ていた。しかし、叙述から離れた気持ちの想像になっている子どもも2名程度見られた。

- ② 物語を創作したり考えたりする活動にはほとんどの子どもが前向きに取り組んでいる。しかし、中には書き始めるまでに時間を要する子どもも数名見られる。

3 単元の目標

- (1) 様子や行動、気持ちを表す語句の量を増し、変身作文の中で使い語彙を豊かにすることができる。
- (2) 変身作文に取り組むことを通して、叙述を基に登場人物の気持ちを捉え、場面と結び付けて気持ちの変化を具体的に想像することができる。
- (3) 進んで登場人物の気持ちの変化について、場面と結び付けて具体的に想像し、粘り強く変身作文に取り組もうとしている。

4 指導計画（8時間取り扱い）

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
1 ・ 2	1 単元の見通しをもつ。 (1) あらすじを捉え、言語活動を設定する。 2 (2) 試しの活動を行い、言語活動の内容を整理する。	○ 『一つの花』のどこを翻作したいかを子どもたちと考える中で、場面の大きな移り変わりに着目し、クライマックス場面を変身作文で書きかえる言語活動を設定する。 ○ 試しの活動を行い、それを読みあうことで、誰視点ならより気持ちを語れそうかを考え、言語活動の内容を整理していく。	
3 ・ 6	2 クライマックス場面の变身作文をよりよいものにつくりかえていく。 (1) 父・母のどちらで書くかを決め、変身作文を書き、問いを立てる。 (2) 全体で立てた問いを解決し、変身作文を書きかえる	○ 父、母のどちらになりきって変身作文を書くのかを決め変身作文に取り組む。 ○ 劇などを通して場面の様子を明確にして考えていくよう促す。 ○ 個人では解決できなかった問いやまだはっきりしていない問いを取り上げ、全体で考えていく。 ○ 児童が学び方や学ぶ相手を自己決定できるような学習形態・学習環境の工夫を行い、自己調整的な学びを促す。 (本時5/7)	【知】 様子や行動、気持ちを表す語を変身作文の中で使っている。 (変身作文) 【思】 叙述に注目して、登場人物の気持ちについて具体的に想像している。 (観察、変身作文、振り返り) 【主】 考えた気持ちを基に粘り強く変身作文に取り組んでいる(観察)
7 ・ 8	3 お互いの変身作文を読みあい、単元の学びを振り返る。	○ どの叙述に着目して登場人物の気持ちを想像したのかを明確にしながらお互いの作品を読みあうことで、言葉への自覚を促す。 ○ 単元で身につけた力を出し合い、それを学びの足跡に残すことで、今後の学習の指標にする。	

5 本時の学習

(1) 目標

一つの花に込められた思いを考えることを通して、それぞれの登場人物の視点から気持ちを考え、クライマックス場面の変身作文に生かすことができる。

(2) 展開

時間	学習活動	子どもの思い・姿
5	1 前時までの学習を振り返り、本時の課題を掴む。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 僕はお父さん視点で書いているんだけど、花をわたしたときのお父さんの気持ちが分からない。 ○ なぜ、たくさんのお花じゃなく一つだけの花をあげたのかが分からない。たくさんあげたらいいのに。 ○ 私はお母さん視点で書いているけど、お母さんはこときどんなことを考えているのかがまだ語りきれていない。どんなことを思っていたのかな。
10	2 課題に対する解決の見通しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ○ お父さんが、一つの花を手渡した場面を考えてみると気持ちが分かってきそうだね。 ○ たしかに。お父さんやお母さんを演じながら気持ちを考えてみるといいかもしれないね。 ○ でも、その場面だけだと気持ちが分かりにくいから、前の場面とつなげて考えるとよさそうだよ。 ○ 二の場面のお父さんやお母さんの台詞とつなげるとゆみ子にどんな思いでコスモスを渡したのか分かりそう。
15	3 場面の様子を演じたり、それぞれの人物の視点から話し合ったりしながら、課題を解決する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ お父さんは「一つの花を見つめながら。」出ていったわけだからきっと思いをコスモスに託しているよね。 ○ お父さんはゆみ子に幸せになってほしいと思っていたんじゃないかな。前の場面で「どんな子に育つだろう。」と心配もしているし。 ○ お母さんもお父さんの気持ちを分かっていると思うよ。だから、コスモスの花を育てたんじゃないかな。 ○ 「一つだけ」花を渡したのにも理由がありそう。もっと前の場面と比べてみると分かるかな。 ○ 前の場面に「一つだけのしあわせ」ってあるからそれをあげたかったんじゃないかな。
10	4 考えたことを基に翻作をつくりかえる。	<ul style="list-style-type: none"> ○ コスモスの花に込められた思いを想像できた。私はお母さん視点で書いていたけれど、その中にお父さんの思いもいれて書きかえてみたい。 ○ お父さんは、ゆみ子のことを思いながら一つの花を手渡していたことを書きかえてみたい。
5	5 本時の学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今日の学習で、一つの花への思いが確かめられた。でも、まだ書きかえられていないところもあるからもっと考えてみたい。



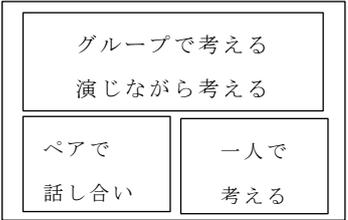
子どもたちは、変身作文を書きながら登場人物の視点で物語を読み返しています。本時では、クライマックス場面をよりよくするために、一つの花にこめられた思いについて考えます。その中で、複数の人物の視点から考えたり、前の場面とつなげて思いや気持ちを想像したりする姿を引き出していきます。

主体的・対話的で深い学びを生み出す教師の支援（発問・指示・教具・評価）

- 前時までの学習を振り返り、振り返りの中から「お父さんがコスモスの花にこめた思いがはっきりしていない。」や「なぜ一つだけあげたのかわからない。」という困り事を取り上げる。そのうえで、「お母さんはどう思っていたか。」と視点の変換を促すことで、父と母にとってのコスモスの花に込められた思いを考えていくようにする。

父はどんな気持ちで花を渡したのか。母はそのときどんな気持ちだったのか。

- 小グループでの話し合いに移る前に、全体で「どの場面に戻ると気持ちを考えられそうか。」や「どのように読んでいくと気持ちを考えられそうか。」を話し合い、解決のための見通しを立てておく。
- 子どもたちが、学習の形態や方法についても自己決定できるように教室環境にも工夫を加える。具体的には、教室を右の図のように3つのエリアに分けるようにする。こうすることで、自分の学び方についても自己調整を促す足掛かりとする。また、ペア同士がくっついてグループになるなどは認め、学習形態に合わせて場をフレキシブルにつくりかえていく。
- 教師は子どもたちの様子を見取りながら、話し合いが停滞しているグループには、他のグループとの交流を促したり、他の登場人物の視点から考えたりすることを促す。
- 演じることに一生懸命になってしまい、思いや気持ちを考えることに目が向いていないグループの様子が見られた際には、「そこからどんな思いが分かるのか。」「やってみてどんな気持ちになったか。」などの問い返しをし、思いや気持ちに目が向くようにしていく。
- 「お父さんの思いを渡すには、コスモスの花を一つだけでなくたくさん渡したらよかったのではないか。」と子どもたちに問いかけ、「一つだけ」に込められた思いにも気付けるようにする。
- 考えたことを基に自分の変身作文をつくりかえるように促す。その際、叙述を基に思いや・気持ちを具体的に想像している変身作文を取り上げ全体でも紹介し、叙述と気持ちをつなげて考えられるようにする。
- 前の場面とのつながりを意識した変身作文を書いている子を取り上げ紹介することで場面同士のつなげて考えることで、より気持ちが想像できていることを価値付けていく。



【教材・教具】
 ○教材文プリント
 ○ワークシート
 ○掲示用拡大本文
 ○タブレット端末

【評価】
 叙述をもとに登場人物の視点から気持ちを想像し、変身作文に生かすことができる。
 （観察・変身作文）

